

## 中里「なにもささ踊り」について

---

種 別 無形文化財  
名 称 なにもささ踊り  
所 在 地 中泊町中里  
保護団体 なにもささ保存会（代表 坂田久仁彦）

### 由来・沿革

「なにもささ踊り」の発祥は、明治時代以前に遡る。元来中里地区で踊られていた盆踊りであるが、昭和30年(1960)合併以降武田・内潟地区にも広まったほか、各小学校においても伝承活動が繰り広げられている。また小泊下前地区においては、中里出身の中学校教諭 渋川正夫氏が作詞した「下前小唄」が、「なにもささ踊り」の旋律で踊られている。



かつては「なにもさあさ節」「中里盆唄」とも呼ばれていたが、近年は「なにもささ踊り」に統一されている。「なにもささ」の語源は不明であるが、「何喪袈裟」あるいは「喪亡袈裟」の字が充てられ、僧侶が袈裟をかけて供養する意味と解釈する説や、「南無阿弥陀仏」の梵語と関連があるとする説がある<sup>1</sup>。

踊り自体の由来については、「弘智法印」「旅の武士」の二説が伝えられている（別紙参照）。いずれも寺院との結びつきを示唆するものであるが、現在は専ら後者が語られている。なお、山王坊の僧侶とされる「弘智法印」に発祥を求める盆踊りは、ほかに相内「坊様踊り（ナオハイ節）」がある。同踊りとは、由来伝承のほか、開催期日・場所（寺院境内）・曲調・歌詞・唄い方・踊り方が類似しており、強い関連性がうかがわれる。

### 開催期日

戦前までは、旧暦7月14日～18日、19日（弘法寺七面様）、20日（中里神明宮）、21日（送り盆）あるいは農作業休みや宵宮の際にも踊った。

戦後は新暦8月15日・16日、現在は「なかどまり祭り」にあわせて8月11日・12日ほか、各神社の例大祭、学校行事等で踊られている。

---

<sup>1</sup> 木村玄三は、なにもささ踊りについて「念仏踊り唄。お盆に墓の前で、この唄にあわせて踊った。ナニモササは、ナムアミダブツの梵語と関連がある。」と説明するが、真偽は定かでない。木村玄三 1977『奥々旋律集成』

## 開催場所

戦前までは、道路や駅前広場、弘法寺・神明宮境内等で踊った。現在は、目抜き道路で行われる流し踊りほか、中央公民館駐車場に仮設された櫓や各神社境内で踊られている。

## 衣装

明治末頃までは、男性は半纏、女性は刺子着で踊ることが多かったとされるが、大正末から昭和にかけて浴衣・着物で踊るのが普通となった。戦前は旧暦だったので寒く、丹前を着て踊ることもあったという<sup>2</sup>。

現在一般的な揃いの浴衣や手拭いは、元々舞台発表用に採用されたものが始まりである。また、年代は不明であるが東京公演の際、花笠ならびに手の甲の造花が追加されたという<sup>3</sup>。

## 唄い方

唄は、音頭とハヤシ（下音頭・下声）の掛け合いで歌われる。歌詞は時代によって変化しているが、「ナニモサーサモーサ」の合唱で終わる点は不変である。

伝統的な唄い方は、ゆったりとしたテンポであったが、現在では本来コンクール用であったテンポの速いものが主流となっている。

## 伴奏

かつては太鼓のみでリズムをとっていたが、昭和 37 年（1962）国立劇場出演に際して、三味線が加えられた。現在は太鼓・鉦・三味線によって伴奏される。

## 踊り方

中心部に提灯( 供養文が記されている )を吊した 4～5m の棹を立て、その周りで踊った。古い踊り方は、手をあまり使わず、足の動きが主体であったため、下駄をすり減らすことが多かったとされる<sup>4</sup>。

現在の踊り方はよりテンポの速い、手の動きが中心であり、 供え物を上げる、 招く、手を打って喜ばせる、 送り火を焚く、 送り出すという 6 拳動で踊られている。これらの振付けは、昭和 30 年前後に当時の婦人会長加藤タキ氏が、古い型の基本を残してアレンジしたものとされる。また曲の途中での反転は、昭和 37 年（1962）国立劇場出演時のアドバイスを基に採用されたという。

## 保存・伝承活動

昭和 33 年（1958）に設立された「なにもささ保存会（坂田久仁彦会長）」によって継承されているほか、町内小中学校・町内会・婦人会等において伝承活動が行われている。

---

<sup>2</sup> 青森県教育委員会 1979 『盆踊りと盆踊り歌』

<sup>3</sup> 笹森建英編 2001 『伝承用マニュアル』青森県教育委員会

<sup>4</sup> （注 2 同）

## 小 結

盆踊りをはじめとする民俗舞踊は、時代とともに踊り方や歌詞の流行廃りが認められ、緩やかに変化を遂げるのが通例であるが、「なにもささ踊り」においては、とくに昭和 30 年代、保存会結成や舞台発表、コンクール出場等を契機として、昔ながらの「楽しむ」ための踊りから、「見せる」ための踊りへと大きく転回した。

たとえば衣装の統一化、三味線の追加・回転方向の反転（昭和 37 年国立劇場出演時）、テンポの高速化、振り付けの変化等は、内外の要請に対応したものである。かつては、ゆったりとした地元用と、テンポの速い舞台用の踊り方が厳然と区別されていたが、現在では地元においても後者の「見栄え」のする踊り方が主流となっている。

以上のように、現在中里地区に継承されている「なにもささ踊り」は、昭和 30 年代以降、とくに昭和 37 年（1962）国立劇場出演時に加わった要素が多いものの、その底流には、「ナニモササ」のフレーズや唱和の形態、仏教に関連した歌詞等に認められるような古態が残されていると考えられる。

また、唄に「ナニモササ」「ナハーオーハー（ナーオハイ・ハーオハイ）」等が含まれるいわゆる「ナニモササ系盆唄」の分布は、津軽地方の中でも十三湖周辺の中里・十三・相内等中世以来の古村に限定され、近世中期以降に拓かれた新田地帯においては全く認められない[図 1～3]。

またこれらの地域の盆唄に共通する「盆の十三日」「寺の上灯籠」「寺の和尚様」等の歌詞は、汎日本海的なものと解釈されていることから<sup>5</sup>、中世安藤氏に遡る由来伝承はともかくとして、少なくとも近世以降の日本海交易や、鎌倉仏教との関連性は首肯されるように思われる。

## 参考文献

成田末五郎編 1965 『中里町誌』中里町

笹森建英編 2001 『伝承用マニュアル』青森県教育委員会

進藤幸彦 1970 「津軽の民俗舞踊」『津軽の民俗』吉川弘文館

青森県教育委員会 1988 『青森県の民謡 - 民謡緊急調査報告書 - 』

---

<sup>5</sup> 青森県教育委員会 1988 『青森県の民謡 - 民謡緊急調査報告書 - 』

## なにもささ踊（何喪袈々）由来

「なにもささ」は何喪袈々から解かれたもので、亡くなった人の御霊を寺の和尚様が袈裟をかけて供養するとの意を表徴したものとされており、今から320年前の寛文年間にある高貴の武士が諸国修行の旅に出家し、陸奥国北津軽郡中里村の薄市山実成寺（現在の弘法寺）に旅のつかれをいやさんと足を休めた。住職はその労を慰めんとし、檀徒達を集めて先祖の供養と共に踊らせたのが「なにもささ」踊りの発祥とされています。

中世期にかけて津軽地方でも純然たる念仏踊りが盆の行事として行われており、平安時代に空也上人が念仏の功德を大衆に教える方便として盛んに普及されたものと伝えられています。実際はお盆に来る御霊精霊を歓待した後踊りによって送る行事とされていました。昔孟蘭盆中は特に盛大で老若男女が二重の輪になって踊り、中の輪の踊衆が上音頭を唄い、外の輪の踊衆が下音頭を唄う掛け合いで唄いながら踊るのです。中の輪にはやぐらをたて、踊衆に与える景品と唄え手には咽喉をうるおす水桶樽を備えて夜おそくまで踊ったものでした。お寺の広場に長い柱を立て、灯ろうに灯をつけて柱の上につるし、そのまわりで踊ったものです。豊作の年は特に盛大な行事として踊り、凶作の年はあまり踊らなかった。

中里村には加藤八右工門という財家の主人がこの「なにもささ」踊りをこよなく愛し、盆中の踊衆に4斗樽の酒樽を備えて1回りして来た踊衆に酒一杯を飲ませ、活気をつけながら盛大に踊らせたものです。当時の加藤家では七里の道を往復するに他人の地面に足を踏み入れなくとも往来ができたという程で、十三湖の水がなくなるか加藤家の金がなくなるかと、この地方の住民が言ったものでした。その加藤家のお力添いによって「なにもささ」踊りが伝承されてきたのです。

歌詞は640年前の元享3年に下総の国香取郡正木郷山桑村の生まれで、同国の大浦村蓮華寺の住職「弘智法印」和尚が津軽の北端十三村に上陸し、市浦村の山王坊開山に16年間滞在の後、越後の国三島郡野積村の海雲山岩坂に至り「深入禅定」の修行に鉢錫をとどめ奇績顕わしてついに「即身即仏」入定なされた全国稀れに見る名僧「弘智法印」和尚が詠みのこした仏様を讃美する歌です。

（辞 世）

かりの身は この松山に終わるとも 心は徒僧の有明の月 （市浦にて）  
岩坂の あるじはたれぞと人問えば すみえにかきし松風のおと （岩坂にて）

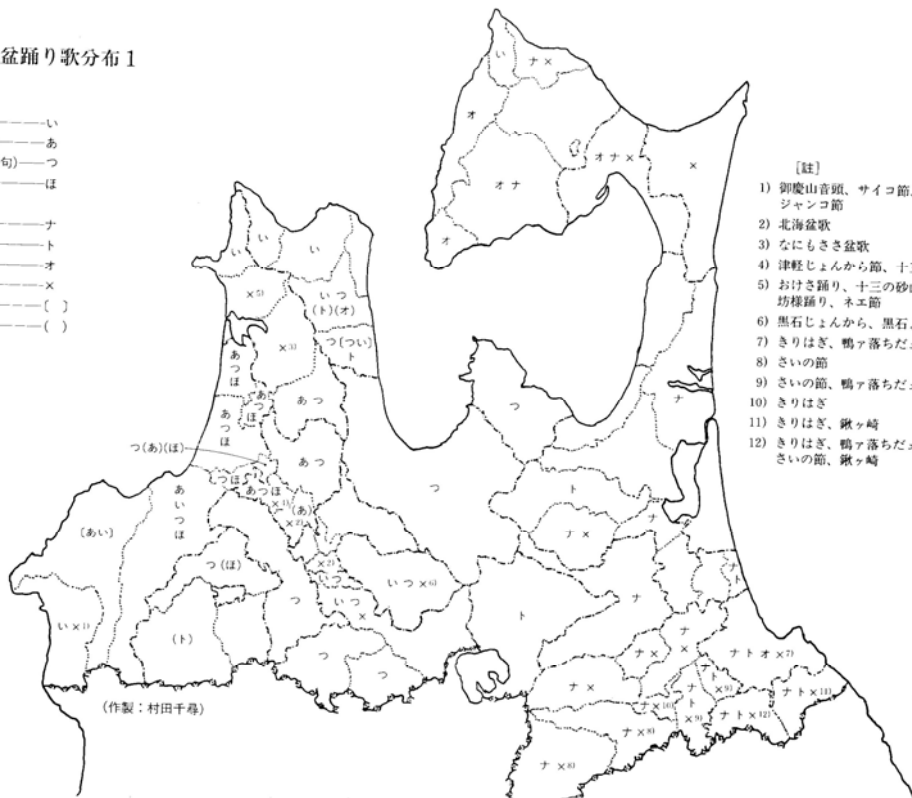
（昭和63年9月5日 青函博公演用）

〔図1〕青森県盆踊り歌分布1

＜凡例＞

津軽系

- いやさか踊り系——い
  - 舞ヶ沢くどき系——あ
  - どだればち(津軽甚句)——つ
  - ホーハイ節——ほ
- 南部系
- ナニヤドヤラ——ナ
  - 虎犬さま——ト
  - おしまこ——オ
  - その他——×
  - 分類不能——( )
  - 盆踊り以外——( )

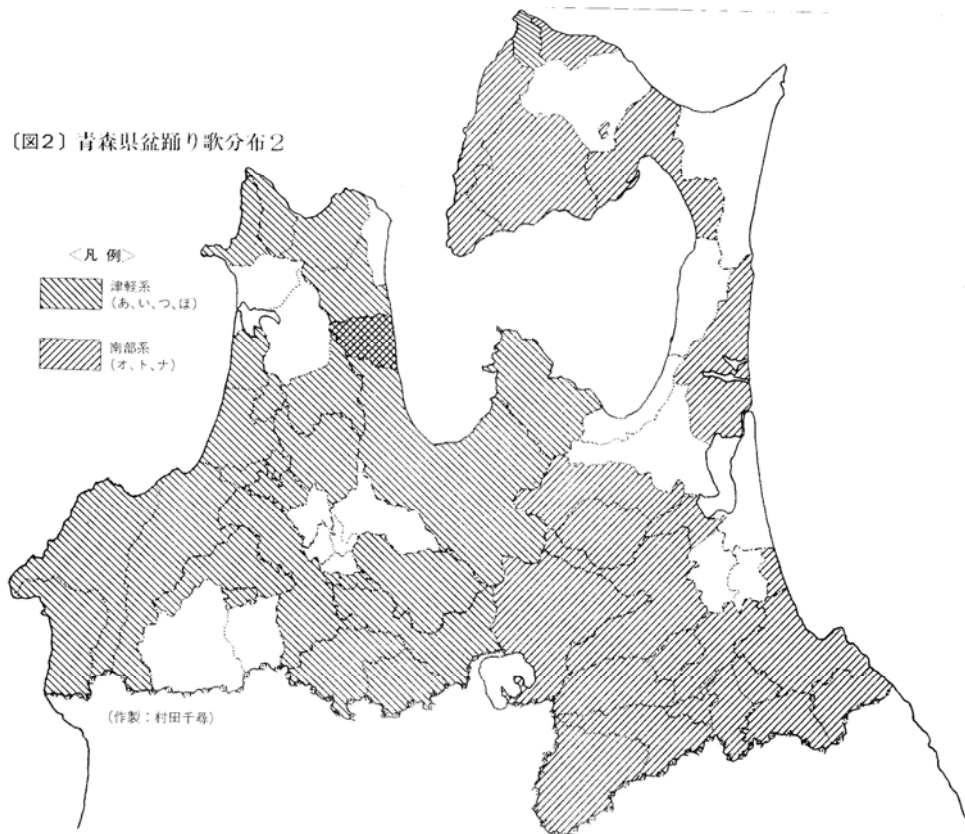


- 〔註〕
- 1) 御慶山音頭、サイコ節、ジャンコ節
  - 2) 北海盆歌
  - 3) なにもさき盆歌
  - 4) 津軽じょんから節、十三の砂山、坊様踊り、ネエ節
  - 5) おけき踊り、十三の砂山、坊様踊り、ネエ節
  - 6) 黒石じょんから、黒石よされ
  - 7) きりはぎ、鴨ア落ちだエ
  - 8) さいの節
  - 9) さいの節、鴨ア落ちだエ
  - 10) きりはぎ
  - 11) きりはぎ、嶽ヶ崎
  - 12) きりはぎ、鴨ア落ちだエ、さいの節、嶽ヶ崎

〔図2〕青森県盆踊り歌分布2

＜凡例＞

- 津軽系 (あ、い、つ、ほ)
- 南部系 (オ、ト、ナ)



〔図1〕 西北地区盆踊り歌分布

